

「暴走する世界」

アンソニー・ギデنز(著)

佐和隆光(訳)

ダイヤモンド社 2001年10月4日刊

20世紀末から21世紀の幕開けにかけて、世界は大きな変動に直面している。全く予想外の出来事が次々に発生し、その原因を解明し、抜本的な解決策を提示できないまま、場当たりの問題処理に追われている。そのような現象を著者ギデنزが「暴走する世界」と捉え、これを制御する上で重要な5つの論点を提示したのが本書である。

不良債権処理や構造改革など、わが国の政策議論は概ね経済問題に偏っており、社会、文化、政治などが複雑に入り組んだ構造の中で総体的に「暴走する世界」を捉えようという発想はあまり見られない。社会学者である著者ギデنزが経済問題にとどまらず、より広い視点から問題を把握している。

すなわち、第一の論点として「経済のみならず、政治、技術、文化にも、グローバル化の荒波がおしよせているのである。つまるところ、それは、1960年代後半以降の、通信システム技術の進歩がもたらした結果なのである」という認識を示した後で、現状「私たちが無力感にさいなまれるのは、個人の能力の欠如ゆえではなく、現存する制度がグローバル・コスモポリタン社会に適応できないからである」と述べ、グローバル化への積極的な適応を強く訴えている。

第二の論点は自然現象などの外部リスクではなく、人間が作り出す人工リスクの増大とその制御計算不可能性についての指摘である。原発事故や狂牛病、地球温暖化現象などに対してどのように対処すべきかという問いに対して、著者は「予防原則」に訴えて、負担の期待値を軽減することであると述べ、そのためには科学技術とのより開かれた関係を築く必要があるとしている。

第三の論点は「伝統は不変である」というのは神話であり、往々にして捏造されたものであるという指摘である。著者は「近代化がひとつの地域内にとどまらず、グローバルな広がりをもつようになれば、さまざまな意味で伝統は変容をせまられる」と論じ、「ひとたび伝統が撤退してしまうと、私たちの人生は、選択肢の多い、したがって熟慮が欠かせないものとなる。自主と自由が尊重されるようになり、伝統のもつ隠然たる力は、より開かれた討論と話しあいにおきかわる」としている。その時、普遍的な価値あるいは道徳律を守る努力が、今まで以上に必要となるというのが著者の結論である。

第四の論点は家族の変容ということである。著者によれば、「目下、世界で進行中のありとあらゆる変化のうち、私生活 性、人間関係、結婚、家族などにかかわる変化ほど重要なものはない」。男が働き、女が子どもを産み、家庭を守るという伝統的家族は、カップル中心の家族にとって代われようとしてい

る。それは私生活をたばねる絆が家族から愛情にとって代わられたことを意味している。そのような愛情に基づいた「純粋な関係」を築き、維持するためには、真の男女同権を確立することが必要になるというのが著者の主張である。

最後の論点は民主主義が浸透するほど民主的プロセスへの幻滅がつのりつつあるという問題である。「統治される側の市民と、統治する側の政府が、情報環境をともにする社会では、在来型の政治は機能しなくなる」と指摘し、それを乗り越えるためには「民主主義の民主化」が必要であると説く。それは、地方への権限委譲であり、行政改革であり、情報公開を通して獲得されるものである。「暴走する世界は、これまで以上に統治 民主主義にしか提供できない統治を必要としているのである」という結論が導かれる。

著者の議論に関心を持たれた方は、前著『第三の道』（佐和隆光（訳）、日本経済新聞社）も併せて読まれることをお勧めする。